おはなし手帖

かくら こう

おはなしの喫茶室

夜を歩く君へ

星はありますか
月はありますか
じゃあ　街路灯はありますか
それなら　懐中電灯はありますか

こちらは雪が舞っています
空はいたって晴れていますが
ほら
ずっと向こうの山から風が運んできたのでしょう
手が凍えてね
字が硬いのはそのためです

僕はきっとずっと夜の道を歩きつづけるのだと思います
僕はこの暗い道以外を知らない
ねえ　だって

この銀河にひとつ浮かぶ　あの太陽がないのなら
世界は闇がほんとうだという気がしませんか

僕らは闇の住人であって
だからこそ　光るものに憧れて
蛾のように魅せられて
そういうことのような気がしませんか

僕は夜の生き物です

この手紙の届く君もまたきっと夜の道を知っている人のように思います
違っていたらご免なさい
どうぞ手紙を破り棄ててください

ねえ

もし君が夜のなかで光を見失ったら
目を閉じてください
目蓋の裏の暗がりには
いくつもの光が
淡い光が
万華鏡のように姿を変えて浮かぶでしょう
それは僕ら夜の住人が体内に蓄積した光の結晶です

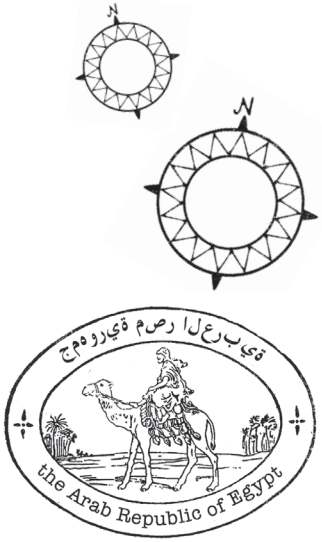
僕も光を失くした時にはそれを見つめます
光の結晶を読み解いて金曜日に君へ送っているのです

暗夜郵便
光の速さで君へ送るのです

僕らはひとりです

だから
どんな君でも
どんな僕でも
今ここにいる
その証を送り合いましょう

月と砂漠に焦がれる



豆電球色の世界できみがまるい息を吐く。

こぼりと浮いたその息を、僕はランプへ閉じこめて、深い夜の灯火にしよう。

月

私は死んだら月へ行くと言った。
きみは私に宇宙を案内してくれると言った。
きみはもう忘れているかもしれないけれど、私は今でも、息が止まったそのあとは、
月できみの名前を呼んでみようと思っている

夜海月

海を横切る橋を渡りざま、雲を蹴散らし航る満月へ挨拶する。
ごきげんよう、ごきげんよう。
酔っぱらいが泳ぐによい晴れた夜。
ごきげんよう、ごきげんよう。
光を撒いて果てまでゆこう。

足音

月を隠したビルの陰　花に酔えない男がひとり
喉を癒す一滴の物語を求め　歩いているそうな。
だれか 彼に 物語を。

月を

重たい色のお月さんが電線にひっかかり、笛を吹くよに泣いてたら、少年少女の過去持つ大人が虫捕り網を引っ張り出して、次々家を飛び出した。誰がお月さんを助けるの。お月さんを連れて帰るの。一等勝を目指して走って。鉛の脚で競って走って。星の声援頭上に聞いて。みんなみんな走る夜。

二つの黙思

なめらかな月面へ座す
あきらめた目鼻の男と
生まれたばかりの芽が
相対して声なき会話を。

人体考察

ひとの内に組みこまれた月は肉へ変化した。
月はふるえる水へ沈み宇宙を思い出している。

横たわる貴婦人

「その灰はなにを燃やして生まれたのでしょう
うつくしい灰と白の寝台で彼女が流し見るその先には
銀の月かがやく天窓があるにちがいありません
きっとここは月を燃やして舞い積もった灰の世界なのです」

砂嵐テレビ

砂嵐を横切り彼女は車を走らせる。
ここはブラウン管テレビの中。
「懐かしい歌が聞こえてきたわ」
ゴーグルの奥の目が細くほほえむ。
目的地はセピア色のオアシス。

彼女は時代を逆走してゆく。

月蝕

「熟れた月を収穫にゆきましょう」
「さ、みなさん」

雲に隠れつつ、月

指先のひびわれが悲しくてココアをつくる。月裏ラジオからマツボックリの唄が流れる。DJ.Moon の選曲はいつでも秘密めいている。
「ただそれだけが僕のひびわれをなぐさめるのです」

月篭

鳥篭に手紙が入っていた。
月を捕らえるため、窓辺へ提げていたものだ。薄い月がすり抜けていったらしい。手紙には月の言語で何やら細かく記されている。解読しようと顔を近づけた処、明滅する文字が目に飛びこみ、脳へ浸透し、僕は鳥に成ってしまった。
もはや夜へ羽ばたくしかなかった。

コブの涙

ここだけの話。
あなたの背中のごつごつした骨のうえにはちいさな駱駝が住んでいます。駱駝のコブには流しそびれたあなたの涙がたまっています。いつでも駱駝はあなたに涙を還してくれます。
誰かへ教える時にはそっと耳打ちしてください。

ここだけの話なので。

月がきれいですね

ずいぶん月のあかりが強いので、どうやら隣家の屋根のアンテナは、月の声を受信しはじめたようだ。
ほのあかるい窓からは、鈴虫のようなその声が、かすかに漏れ聞こえている。

月の砂漠　駱駝行

今宵もブリキの駱駝のぜんまいを巻く。
砂漠の旅を夢にみる。

月を運ぶ

女王様が歩いていた。
豪奢なマントをアスファルトに滑らせて。両腕には曇った月を抱えている。侍女のひとりも従えず。しずしずするりと角を曲がった。絵でも鑑賞するように立っていた私が漸くヤヤっと目を疑い、追いかけた角はバロックのうつくしい闇。
空へ月が白く灯った。

舞台装置　蛙

細い月灯りの下／群青の草むら／姿の見えぬ蛙／呼び合う歌のただなか／佇む青年
少女①が尋ねる
「何をしているのですか」
「拾っているのですよ、蛙の、声を」

青年の答えるその声は少女②の心臓をひと突きする
少女①は少女②の左手の小指を握って帰路を促し退場する
月へ

日記

屋根裏部屋で古い手鏡を見つけました。覗きこんだ手鏡から風が吹いてきました。産毛をなでる風は熱せられた砂の匂いがします。手鏡には細い月が映っています。銀の月は扉なのだと気づきました。砂の国の匂いがします。懐かしいわけもないのに懐かしく、涙が落ちました。

物語の起点

「いつのまにかまるくなっていたあの月が夜空の釦だとして、それを押した時に何が起こるときみは考えるのか」
机の上に尻尾を打ち、猫が問いかけたその瞬間、たぶん月は弾けたのです。

荒野へ

別れ道、そちらは砂漠よ。
青い衣をまとって駱駝へ跨る。
あなたはもう朗らかなだけの子供じゃない。
別れ道、渇く喉を潤した。月の盃に涙を重ねる。
あなたはもう立ちすくむだけの子供じゃない。
夜の淵に灯りを隠し、ひとり紙の砂漠へだって向かってゆくの。

あなたは、もう。

サハラのひと

あなた　月の国からやって来たひと

岩　と砂と　風　にはこばれて
灼熱　と冷酷に肌を晒して
目に地球　を宿して
太陽に伏して　祈る
木々の涙　をコップにそそいで　あなた　へ贈りたいんです
月の国は　幼い僕　の憧れでした。

観察日誌

「某月某日。月面へ降っていた雨はやんだようだ。水たまりが太陽を受けてかがやいている。なまぬるい夜だ。宇宙もぼんやりとしている。まさか孵化しないとも言い切れないだろう」

鍵

「鍵を開けておいたよ。好きにしなさい」
真っ暗な坂道。とんがったY字路。どこからか声が聞こえた。
でも、
「誰ですか?」
「それはドアですか?」
尋ねても返事はない。蛙が鳴くだけ。
「何のドアですか?」
最後に一度、聞いてみる。
すると、月の隣へ隙間が開いた。
ような、気がした。

月光浴

蛙がしゃべる。月の光を求めすぎた少年がいたことを。深夜、肌に白銀の鱗粉が浮いた。朝には鱗粉を残して消えてしまった。
「うつくしいものは残酷だ。注意なさい」
蛙の忠告、仰げば月が冷ややかにこちらを見ていた。

広場

月が産卵している。
靄のたちこめる広場で、私は珈琲を淹れる。一杯、もう一杯と、靄から突き出る手へ渡す。
犬が骨を齧っている。産婆の犬だ。月へ手伝いに行ったまま、今夜も戻らないだろう。
あらゆる音楽と詩情が靄をつくる。物語はひとすじの線を描く。黄昏の広場。誰も帰る家がない。

そのとき海の音を聴いた

喉に刺さった棘が抜けないまま、海岸通りを歩いていた。通りがかった暗い波止場の奥に赤い光がちらちらとゆれている。
「だれか煙草でも……？」
ぼんやりと見つめていると、その赤い光は点滅しながら晴れた夜空へと昇っていった。

海辺のこと

風船に吊られた少女が、自転車を押して、砂浜をゆく。
僕は貝殻で小指を切る。
雲影が海月を呑む。
岩場では老女が波を汲み、初恋について山羊へ説く。

翻訳士

昔、海辺に翻訳士が住んでいた。理科室のような小屋にはうつくしい貝殻が重なっていた。たびたび彼は貝殻を耳へあて、それのささやくちいさな話を翻訳してくれた。風のやさしい日には、泡のような彼の声が聴こえてくる気がする。

噂

あの灯台守、いつも暗くて冷たい塔にひとりこもって背中を丸めてた灯台守、悪魔にも恐がられる顔して酒の代わりにミルクを飲む灯台守、近頃海に落ちた小さな星を拾って育てているんだって。ほら、だからあんなにぴかぴかあったかく、あの灯台が光るようになっただろ。

珊瑚が死んだ日

彼女の為にコップへ塩水を注いだ。でも、口をつけないし、僕と目を合わせようともしない。
「一体どうしたの?」
尋ねると、彼女は目に炎を燃やした。
「今日ね、私の古里に土が降ったの。それだけ」
彼女は尾ではげしく水を叩き、水槽の深くへ潜った。

夢に生きるひと

「僕は孤独だけれど、さみしくはない」
明日、五時に彼は目覚めるだろう。だれもいない海辺の洞窟で。
月が雲を溶かすから、ラジオには波の音が混じる。
(波には貝の声が混じる)
「町をつくりたいよ、波のはざまに」
彼は夢に生きるひと。
背骨に沈黙を乗せて、海を航る。

星

溺れ落ちる雲のむこうに星がある
「大きな星

私など蟻よりもちいさく圧する
「大きな星が
そういう星がごろりごろりと回転する海に向かって
「暗い暗い海
浅はかな戯言などつぶやいて
すべて許されていることも知らずに
「戯言を浮かべる幸福に気づいていたのだろうか」

眠れぬ夜に

珈琲色の海から不眠症人魚が顔を出した。
今夜も灯台からはかすかに音が聞こえる。珊瑚酒家の博識主人によると、それは砂糖菓子的音楽と分類される。
砂糖音は珈琲海にぽとりぽとりと落ちる。砂糖に耳を傾けるうち、人魚は眠くなる。
やがて、ぽとり。

甘い珈琲に人魚は沈む。

遺棄

「裏町貧民窟に棲む僕の愉しみは、防波堤に立つこの時。ほら、一日中頭に響いたドリルみたいな音が消えた。
夜の海は鎮静剤だ。水平線も闇に隠れる。僕も、」
彼はひとしきり声を海へ捨て、町へ戻った。一体それを拾う者があるというのか？
そう。誰もいない。
水面を漂う声を、波が砕いた。

裁く

僕が魚をさばくのを　じっと見つめる人魚がいる

甘い珊瑚をかみ砕き　じっと見つめる人魚がいる
その目
その目が包丁みたいに僕を切る

三月のくじら

空に飛び出たくじらは
夜の星と眠る人々の夢を
大きなひれでもってかすめ取り
暗い海にひそむものたちへばらまいて泳ぐ

泡立ち　にごり　きらめいて
深い深い底まで届く
きっと届く

くじらは信じて
空を飛んで海へ戻る
何度も
今夜も
繰り返している

2011/6/11

2012/3/11

空と海とをかきまぜつづけたくじらは
やがて海から飛び出したがる色とりどりのヒトデを見つけた

くじらの吹く潮に乗って
ヒトデはきらきら舞いあがる
おかえり　おかえり　あなたの宇宙へ

くじらは歓び
海底をさらい
尾を打ち
潮を吹いて
泳ぎ廻る

おかえり　おかえりと　歌いながら

「そろそろあのくじら、まいってきたのじゃないのかい」
空と海をかきまぜつづけるくじらを眺めて陸のだれかがつぶやく。
「どれどれ、あの大きな肉のかたまり、獲りに行こうじゃないか」
煙草をふかしてあのひとがいう。
「やれやれ、傷に薬を塗りに行ってやろうじゃないか」
ねじりはちまきをしたあのひとがいう。
くじらの立てるしぶきの音も聞こえない、お酒にひたったあのひとは、なにもいわずにげっぷを吐いている。

2013/3/11

2014/3/11

ベルが鳴った
そのあいだ
世界が静かになった
沖を見れば
くじらは海をかきまぜつづけている
沈むヒトデを噴きあげ
光る空へ届けている
「いつ終わるんだい」
漁船が声をかければくじらは答える
「また始まったんだよ。始まりつづけるんだ」

春を打ち消す雪が波頭に触れて
少女は黒い砂を盛る

とがった断崖に膝をつき
遠い処の青い天を想像する

お元気ですかと目でささやき
爪にはいりこんだ砂を噛む

ちいさな肩へ手を置くように
くじらの声が届く

高く　高く　高く　高く

少女は立ちあがり
膝に砂のついたまま海を見渡す

2015/3/11
2016/3/11

もう降らないと思った雪が
夜になって降っている

白いひとひらに
くじらからの手紙がまざっていた

「ドウシテマスカ、飛ンデマスカ泳ギシテマスカ、
笑テマスカ」

海月のインクで記された言葉は
すぐに手のひらで溶けた

「あれから梅の木が育った気がします。少しだけ」
私は返事を風へ渡した

わたしは貝を拾う
足が見つけたときだけ

わたしは貝を埋める
風が巻きあげようとするから

ちっぽけだった
ちっぽけさは変わらない

いつかぜんぶくじらへあげようと思ってる

それまでまた
貝を拾って
貝を埋める

2017/3/11
2018/3/11

コップに水を汲んだら　くじらが泳いでいた
まさかと思い　浴槽を見ると　くじらがいた
そういえば
明け方の夢のほとりにも　くじらがいた
「海はあなたの内にも満ちていますから　わたくし
はどこにでもゆけるのです」
星をすくい　空へかえすくじら
わたしの内にも
沈んだ星があり
それを見つけて
空へかえすのだ

「三月のくじら」は毎年３月11日に書いているものです。その日その時になにが泳ぐのか、いつまで泳ぎつづけるのか。つづくときまで。

猫偏愛の

……つまり猫の愛らしさというものはその姿形のみならず、膝へ乗った時の重みややわらかさにある。飼い猫に関して言及するならば、飼い主にだけ見せるくだけた態度である。その場合、飼い主はおそらく猫の下僕にすら嬉々として身を落とすものである……

鏡猫

合わせ鏡のはるか奥の奥から猫がどんどんつぎつぎめえめえとこちらへやって来るではありませんか。

猫背

「立派な猫背は堂々胸を張るものです。あなたが背をまるめるのとは随分違うのですよ」

電信柱の暗がりから声がして振り返る。

木馬がゆっくりと僕を追い越してゆく。

まるく彫られた目に同情が見て取れる。

「呼吸して」

月は空になかった。

木馬が背へ乗せていたからだった。

秘密

錆びたビスケットの缶からひそひそと声が聞こえる。
猫が二匹遠くで顔を寄せ、親密に互いをなめあう。
合わせ鏡の奥の何人目かの僕がこちらへ背中を向け、誰かになにかを囁いている。
なにも理解できない僕は恥じらって、いっそ目と耳を落としてしまおう。

毛糸

雪がたくさんふるまえに、猫のかあさん、毛糸で編みます。今年生まれた仔猫の靴下。仔猫は毛糸にからんで遊びます。もっともっと、かあさんにかまってほしいんです。

路地裏で嗅いだ話

「新月に」「鉄砲は」「アナグラ」「否」「うつくしく」「囲む」「静かが前提」「ユキチを燃やして」「土を詰めて」「可」「電線を切断」「ひっくり返す」「可」猫の顔をした子供らが密談している。芳ばしく、きなくさい匂いが。「うつくしい空」「可」「変化」「可」

猫挽き珈琲

隣の珈琲屋は豆挽き名猫を雇った。猫の挽く珈琲がうまいと評判は上々のようだ。老眼鏡のマスターが猫をねぎらい顎をなでる。どちらがうらやましいのかわからないほどうらやまし。
「戻って働きなさい」
マスターが今日も私に厳しい。

猫町

あちらの旦那もそちらの姐御も今夜は猫町でぬくまるらしい。なんでも夜行の祭があるとかないとか。犬を寝かせたら繰り出そうかと隠れ猫党も思案する。活きのいい鼠の手土産は歓ばれるというね。マタタビは禁じ手だ。さて星も消えた。行き時だ。みんなもう大変なにぎわいだ。

幸福な月夜

虫の声に合わせて呼吸したら、通りすがりの猫からウインクされた気がした。

「まさか、ぼくをすきなの？」

「そういうことにしておいても、いいよ」

うしろ姿、猫のしっぽがゆらりゆれた。

耳虫症

深夜、獣医が渇いた水路へ何かを撒いていた。

「これは虫の声さ。猫に食わせて煩い声を虫の声に変えてやるんだ」

水路からかすかに虫の声が聞こえた。咄嗟に僕は彼を突き飛ばした。

彼の手から金平糖が散った瞬間、虫の声が爆ぜた。

以来、僕の耳では虫の音がひとつ鳴りつづけている。

暖

三十年ともに暮らした猫が夏の暑さにとうとう逝ってしまいました。寒さの増すごとにあの子の冬毛を思い出し涙に暮れてすごしておりましたところ、最近畳から猫の毛のようなものが生えてまいりました。懐かしい色、手触り。あの子が最期に掻いた畳の傷痕から生えているのでした。

猫目鏡

「鏡よ鏡、世界でいちばんうつくしいのは、だあれ」
湖のような
宇宙のような
ふたつひらいた鏡へ
問いかければ
「それはもちろん僕でしょうね」
すきとおる鏡の目がしばたく

不平等

５ｋｇのたっぷり猫のつまった猫を
鱗雲市場の古狸から買い受け
５ｋｇのたっぷり猫のつまった猫は
人間椅子として僕を飼い馴らす
猫と僕の契約は
まったく不当で不平等
僕がいかに尽くしても
猫は気まぐれ
いつでも古狸の元へ
帰ることができるのです

計画的

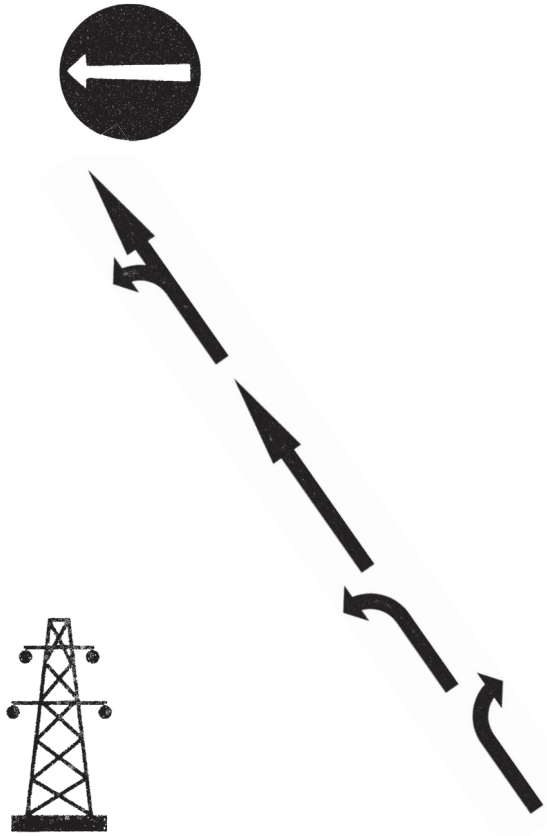
三秒後に僕が狂ったら
一緒に踊ってくれるのは
模型猫だけだろう

あなたとは健全な話をしたくない
つぶやいて頬を染めた犀も
川を泳いで去るだろう

有識者は僕を白い病院へ送るべく
誓約書を持ち追ってくるだろう

だから三秒前
模型猫を懐にロケットへ乗り
この町を発つ

地図のない町を歩く



電信柱の鳥が朝に残った月をかじっていました。

街角で

うすぼんやりした街角へ、うすぼんやりした私は椅子を出し、うすぼんやりしたコーヒーを飲む。
さて、夢をみよう。

夢

この世界に生まれて一番最初に見た夢は、記憶のどこかに隠れているはず。
彼はそれを知りたくて、いくつもの夢をひっぱり出しては検証する。
夢は百に千にからんで万華鏡となる。
彼は目眩にうっとりと酔いながら、今夜も万華鏡の中を泳いでいる。

靴音

盲目の男が靴音を拾うため街角へ立っていました。私がその前を通ると、彼は石畳に飛びつき靴音を拾って貝殻のように耳へあてがい、そしてため息を吐いて靴音を宙へ逃がしました。探していた誰かの靴音と、きっと似ていたのでしょう。

花酒

今は蕾のこの桜、僕の国では、蕾がふくらみはじめると、花が開くまで、お酒ほろほろと待ちつづけます。春の匂いもあでやかに、はらり開いた瞬間の、みんなの歓び。ひとり窓辺で花待つお酒。すきとおるその奥に、僕は記憶の桜を見るのです。

川

夏の匂い立ち昇る川辺で列車の音に轢かれる。鳥の影に追い越される。だれかの落としていった影が風に吹きあげられて飛んでゆく。容赦なく進む。水の流れの只中に立ち、僕は雲を見あげる。耳元で声が聞こえる。
「大丈夫だよ」

珈琲町

眠れなくなるとわかっていて珈琲を飲む。
黒い夜に隠されそうな人を知っているから、あの町では。
だれかが必ず珈琲を飲む。
陸の灯台へ火を絶やさないため、あの町では。
だれかが必ず珈琲を飲む。

ねえ

ねえ　ご存知かな。
きみが屋根裏へ忘れた白い本。
ほこりにも負けないまっ白な本のこと。
月が生まれるたびに本は卵を生んでるってこと。
その卵を割ってきみの朝食にしてるってこと。
きみは白い本でできてるってこと。
ねえ　きみはなにを生みだすだろう。

非公開

彼には「感情がない」というのが通説だったが、ある角度ある側面ある切断面から実験観察すると「どうやら感情がある」というのが彼女の見解だ。もっとも、それを世界に公開する必要はまったくないと彼女は考える。

彼女の頬はスタンプを押したようにくっきりと赤い。

空景色

雲の舟がよぎったあと、太陽の色が変わりました。
空のひとが、太陽交換をしていったようです。

おみやげ

「雨で道が電燈にぬれていたから、すくってきたよ」
傘もささずに帰った父が盃にした両手を見せた。そこにはまばゆい光が波打っていた。奥にちいさな魚影が見えた。あの光をどうしたのだったか。思い出せる気がして、夜道に傘を閉じてみる。

櫛

櫛にだって悪を語りたい夜がある。誰もいない洗面台で。

いたずら

あの日写した雨の影をひとつぶ、通りすがりの婦人の耳へ、はじいて飛ばす。
今日とは違う雨音がひびくでしょう。

入浴剤

森で木漏れ日を収集する男に話を聞いた。
「これは入浴剤に加工します。真暗の浴室で湯船へ溶かして使用します。ちかちかと瞬く光に囲まれて森林浴できるというわけです。あまり長くお湯に浸かっていると日焼けしますのでご注意を」

雨足

雨の子供が靴職人の家の屋根を跳ねて居りまして、目覚めた職人ランプを灯しまして、雨の小さな足に似合う靴を仕立て始めた秋の夜でございます。

迷路の町

あの町は迷路でした。目的地へ辿り着くことも家へ帰ることも容易ではありません。人は皆大きな鞄に水筒と寝袋を提げて歩きます。今日会った人と偶然再会する可能性は極めて低い町です。私は彼女と出会うや共に町の外を目指しました。今はふたりこの村で苹果を育て暮らしています。

疑う人

「いいえだめです。まだ穴がある。そんなもの信じることはできない」
彼は疑う、小さな世界の隅の隅まで。一点の翳りも許せない。彼は楽園を夢見る。すべてがそろう、矛盾のない、明るい、誠実な楽園を。
彼は疑う、涙をためて。
「だめです、まだこのままでは」

紙

紙売りから「いたずらなまでに白い紙」を買った。太陽みたいに白い紙。最初に何を書こうか描こうか。迷った末に真夜中のインクで音符をひとつ。記したらすぐに紙は跳ねて道へ飛び出す。あわてて追いかけると音符の紙は踊りながら紙売りのポケットへするりと入った。

星印酒造より

並ぶ瓶の中ではぜているのは冬から春にかけて集めた星の欠片です。
夏の間、日の出から日没まで野生的な太陽へ晒して不純物を蒸発させます。
すると星のきらめきは衝突を繰り返し、やがては融合し、うつくしい酒となります。
現在、光量管理に努めております。

見張り台から

お山の上の雲の亀裂から夜が溶けてきました。電燈係員は巡廻を開始してください。なお、溶けた夜を汲みにゆかれる方はほのかな灯りだけをお持ちください。大袈裟な灯りは夜を凍らせてしまいます。

金平糖

うるさい星がみんなどこかへ行った暗い夜。電燈係員が公園で煙草をひとつ、赤い灯火の休憩時間。煙に喉を灼かれた電燈係員がひねった蛇口から流れ落ちたのは、千に光る金平糖。電燈係員も公園も町も島も海も隣の大陸も、みんな金平糖に埋め尽くされたっていう話。

帽子

帽子の内側で記憶がやわらかな渦を巻くのだ、不用の帽子があれば譲って呉れと回収人が粘りついてくる。強引な回収人を追いやり、納戸から麦藁帽子を探した。虫が食ったリボンをなで、帽子の闇を覗き、頭へのせてもみたが、なにも思い出せなかった。